



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

リビア：トルコがトリポリのハースィー「首相」と会談

10月20日、トルコのエムルッラー・イシュレル・リビア特使（前副首相）は、東部トブルクの代表議会を訪問した後、西部のトリポリとミスラータを訪問し、ハースィー「首相」と会談した。現在リビアには2つの政府が存在しており、国際社会はトブルクのシンニー内閣及び代表議会を正統な政府・立法機関と認めている。トルコは、外国としては初めて、国際社会から正統な政府として認められていないトリポリ政府と接触した形となる。

イシュレル特使は、20日にマルタ訪問中のシンニー首相と短時間面談した後、東部トブルクへ飛び、代表議会のアギーラ・サーリフ・イーサー議長及び議員らと会談した。そこで、同特使は、代表議会こそがリビアの正統な立法機関であることを表明し、リビアにおける完全な戦闘停止を呼びかけ、トルコはリビア危機解決のための国民対話を支援すると述べた。

翌21日、同特使は西部のトリポリを訪問し、ウマル・ハースィー「首相」と会った。ハースィー内閣とは、8月に暫定立法機関の国民議会から正式な立法機関の代表議会に権限が移譲された際に代表議会の正統性を否定したグループが、トリポリに独自の内閣を形成し、成立したものである。ハースィー内閣はイスラーム主義勢力を支持基盤とする。また、同特使はミスラータ地方議会の議長、議員、政治幹部とも会合を持ち、リビアの政治・経済・治安状況について話し合った。同特使は帰国後、トルコ航空のミスラータ便を10月27日から再開すると発表した。

評価

トルコがトリポリのハースィー内閣を訪れた背景には、域内イスラーム主義勢力と関係を構築しておきたいトルコ政府の意図が見える。今次訪問でトルコもトブルク政府の正統性を認めたが、同時にトリポリ政府とも関係を形成することで、トブルクとトリポリの両方と関係を有する唯一の国として、リビア危機解決における自国の重要性を確保しておきたいのかもしれない。ミスラータ便の再開の発表についても同様のことが言える。多くの海外航空会社がリビアへの就航を停止しているなか、トルコ航空がミスラータ便を再開することにより、トルコはリビアに貸しを作ることになるだろう。しかしイスラーム主義の民兵組織を支援するハースィー内閣やミスラータとの関係強化は、「イスラーム国」対策をめぐり軋轢が生じているトルコ・欧米諸国関係にさらに問題を増やす可能性がある。

（金谷研究員）

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799